

『浮世物語』の中の身体に関わる表現

計良 吉則

順天堂大学医学部医史学研究室

『浮世物語』は寛文五年（1665）頃に刊行された、いわゆる「仮名草子」のひとつである。この散文の著者は浅井了意と推定されており、了意は他に『かなめいし』や『御伽婢子』などの作品を残している。『浮世物語』が作られたのは四代將軍家綱の治世であり、明暦三年（1657）の「町触れ」以後は公に出版規制が行われるようになった。そのような背景もあり、『浮世物語』は現実の政治・社会への批判意識を持ちながらも、トラブルを避けるための自主規制やカムフラージュが随所にみられている。

主人公の「浮世房」は得体の良く知れない滑稽な人物として描かれ、時に政道批判のようなことを行い、時に知足安分の生き方を語ったりする。また駄じゃれの笑い話に終始する章段もあり、全体としてはやや散漫な印象で、そこにはやはり現実批判を目立たなくする意図が感じられる。

『浮世物語』は当時の一般庶民（町人）の思いが想像される内容であり、そこで用いられている身体に関わる表現に注目することは、当時の身体観を知るうえで意味があると考えられる。

初めに、身体の動作や状態を示す表現に関して。「行く」「帰る」「参る」「立つ」などの体の移動や運動に関するものが圧倒的に多い。「又行きて逢ひぬれば」、「京をさして逃げて帰る」などがある。感情・精神作用に関するものも多い。「宿老大に腹を立てて」、「笑ひどよめき」などがある。病的状態・障害に関するものが比較的多く、「胎毒」、「疳の虫」などがある。存在を表すものとしては、「法師有りけり」、「門脇にすみけるほどに」などがあった。死に関するものは「身まかりぬ」、「病なくして死す」などがある。老若に関するもの、誕生に関するもの、体の美的表現は少数ではあるが、それぞれ「老いたるも若きも」、「祇園女御の生みたるころ」、「腸持ちの阿弥陀如来かとあやしまれ」などがある。婚姻や契りに関するもの、体の清潔に関するものはごくわずかであった。

次に、身体の部分や分泌物を表現したものに関して。圧倒的に多くみられる用語が「身」で、「その身のためなれば」、「和殿の身をたしなませ」などがある。次に多いのが五孔を表すもので、「目の前に見え」、「赤く笑める口もとは」などがある。四肢に関するものも多く、「足を空になし」、「手のとどかぬごとく」などがある。腹や腰など体幹に関するものは、「思ひ置きは腹の病」、「腰もとたをやかにして」などがある。頭頸部に関するものは、「頭には甲瘡」、「首だけつかりて」などがあった。分泌物や排泄物に関するものは少なかった。

『浮世物語』で最も特筆すべきことは、わが国古来の概念にはない「脈（脈）」および「五臓六腑（腑）」に関する記述があることである。

巻第二の二に、にわか医師となった主人公が田舎の裕福な家で病人を診察し、知ったかぶりの結果誤った薬を処方して大変なことになる「薬ちがひをせしこと」の章段に以下の記述がある。「およそ脉に浮・枕・遅・数の四あり。人の両の手に寸・関・尺の三部、左右六脉にをのをの浮・枕・遅・数をかくれば、六脉には廿四脉これあり。これをこまかに取り分けて、五臓六腑の病のしなじな、風・寒・暑・湿・気・血の虚実、内傷・外感のもとを正しくして薬をあたふるに、いずれの病もいへずといふことなし。中にもこの病は、悪寒・発熱・頭痛あり。悪寒とはさむく、発熱とは熱氣の事、頭の痛みこれあり。脉は又緊絃なれば、……」

『浮世物語』の作られた1600年代後半には、中国医学の影響である「脈」および「五臓六腑」の概念が一般庶民にも浸透していた、あるいは浸透しつつあったという一つの証拠といえる。